

# いしかわの遺跡

## 土器野焼き



当センターにおいて、毎年土器の野焼きが行われています。縄文土器（開放型）と弥生土器（覆い型）では野焼きの方法が異なり、当時の人々の知恵の一端を伺い知ることができます。

〔写真中央：縄文土器野焼き 上下4：弥生土器野焼き〕

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1  
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731  
E-mail mail@ishikawa-maibun.or.jp  
ホームページ <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

## 平成16年度発掘調査から

# 東三階A遺跡



遺跡上空から北西方向を望む



調査区北半部全景（西から）



掘立柱建物と石組み井戸（上が南）



石組み井戸（中に五輪塔の火輪が見える）

<sup>ひがしみ かい</sup>  
東三階A遺跡は七尾市東三階町地内に所在し、石動山系から流れ出し七尾西湾に注ぎ込む二宮川の右岸に面した丘陵裾に位置します。二宮川沿いの丘陵地には総数500基を超える鳥屋・高階古墳群が分布することが知られていますが、遺跡背後の国造山（<sup>こくぞうやま</sup>標高63m）周辺にも多数の古墳が築かれています。

県道七尾鳥屋線改良工事とともなう発掘調査区域は谷出口にあたり、北半部（谷右岸）で、室町時代（15・16世紀主体）の掘立柱建物、石組み井戸、土坑等が確認されました。緩斜面を削平し設けた平坦面に配置したもので、建物規模は2間×4間とみられ、数度にわたる建て替えが行われています。井戸の石組みには自然石の他に五輪塔も使われていました。また、建物南側には区画溝が確認されました。

調査区中央部は、幅約15m、現地表から最大で深さ約3mを測る谷地形となっており、谷底から縄文、弥生、古墳、平安、鎌倉、室町の各時代の遺物が多数出土しました。これらは混在して出土しており、多くは周辺から流れ込んだものと推測されます。ただ、谷奥から中程にかけて多量に出土した平安時代（9世紀後半主体）の遺物には、瓦塔のほか「加得」、「十」等の墨書土器約40点や木製箸などが含まれ、当時、ここで何らかの祭祀を行った可能性があります。

## 栄町遺跡

七尾市栄町<sup>さかえまち</sup>遺跡は、一般国道249号改良工事に伴う発掘調査であり、昨年度より開始して今回の調査で2年目となります。昨年度の調査では奈良から平安時代にかけて存続した2列の板塀や、4間×7間を最大とする複数の大型掘立柱建物などの遺構が確認されています。

今回の調査区は、昨年度調査区の西側に位置し、奈良から平安時代の遺構として新たな板塀の他、道路側溝と考えられる溝を検出しました。

板塀は、西面が6間以上、南面は3間でいったん途切れ、南側へ位置をずらして更に6間以上を数え、調査区の外側へと続きます。この途切れた部分が入り口として利用されたのでしょうか。また、板塀の特徴として、およそ2.0～2.5mの間隔で溝の内部に板を支えるための支柱穴が掘削されますが、その間隔が一定では無いことや、溝の底面に凹凸が認められることなどから、昨年度検出した板塀と同様の特徴をもった縦板塀と考えられます。なお、調査段階では板塀の内部で建物跡を復元できませんでしたが、複数の柱穴を検出しているため、小規模の掘立柱建物が存在した可能性があります。

道路側溝と考えられる2本の溝は、板塀よりも新しく、南北方向に主軸をもちます。耕作に伴う畝溝とは特徴が異なることや、両側溝の内側では周囲に比べて遺構の密度も希薄となることから、現状では道路側溝の可能性が高いと考えています。この道路状遺構をまっすぐに延長すると、南側約1kmで能登国分寺へ達し、また、北側約2kmで七尾湾へと至ります。このことから港と国分寺、或いは国分寺周辺に存在したと想定される能登国府とを結ぶ道路として重要な役割を果たしていた可能性があります。

この他、古墳時代の平地式建物の周溝や、平安時代以降の耕作に伴う畝溝、下駄や漆器椀などが出土した鎌倉時代の井戸、時期不明の掘立柱建物群などがあります。



調査地全景（上が北）



板塀（南西から）



道路状遺構（北から）

## 飯田町遺跡

飯田町遺跡は珠洲市飯田町地内に所在する、主に古代から近世にかけての遺跡です。遺跡の北側には、通称城山と呼ばれる丘陵や春日山がそびえ、東側には若山川が流れています。この遺跡は、昭和62年にその存在が確認され、今回が2度目の発掘調査となります。

今回の調査では、中世から近世にかけての掘立柱建物跡や杭列、井戸跡、区画溝などが確認できました。また、それら遺構からは、珠洲焼の甕やすり鉢片、青磁碗、瀬戸・美濃焼の天目茶碗などが出土しています。

調査区北部は谷地形であったためか、建物跡は確認されず、近世には田畑として利用されていました。

井戸跡や建物跡などは、調査区中央部の杭列や切土造成の痕跡より、南に向かってひろがっていました。井戸跡は6基確認され、そのうち1基では、砂地の地盤に対する「ろ過」用として、拳大の礫を敷きつめていたことが確認できました。

また、建物跡やそれに伴う区画溝などは、地形的にやや高く、地盤も安定する調査区の南半部にみられ、調査区に対して、ほぼ直行ないしは平行する方向に軸をもっていました。

調査区内からちょっと目を離し、上空から現代の飯田町を眺めてみると、調査区周辺の家屋が同じような軸をもって建っていることに気が付きます。また、近世末期に当時の飯田町の家屋や小路が描かれた絵図面を見ても、その町並みがいかに現代の町並みに色濃く残っているかがわかります。今回の調査成果から、こうした町並みの基本となるような形態が、すでに中世から近世にかけての時期に形づくられてきたことをうかがい知ることができました。

町並みの形成過程や井戸跡にみられた生活の工夫...、発掘調査だからこそみえてくる歴史を、今後の出土品整理作業も含め復元し、珠洲の豊かな歴史を解明していきたいと思えます。



飯田町の町並みと調査区（北から）



掘立柱建物跡と区画溝群（北から）



井戸枠に結桶が用いられた井戸跡



結桶内には「ろ過」の役割を担った礫が敷きつめられていました



井戸枠に石組み+板材+珠洲焼の甕+曲物が用いられた井戸跡

## 平成16年度 親と子の発掘体験教室

七尾市国分B遺跡 7月31日(土)



この遺跡は「・・・時代の遺跡です」  
(プレハブの中での説明)



沢山の土器が出土しています。



新聞記者からインタビューを受けて  
います。「発掘体験楽しいです」。



土器を掘る体験を終え、道具を洗っ  
ています。



掘り出した土器などを洗っています。



掘り出した土器の説明をしています。

小松市白江梯川遺跡 8月21日(土)



この遺跡から「・・・が見つかりま  
した」。(発掘現場での説明)



家族で参加しています。



「ほら、大きな土器が見つかったよ」。



お父さんも一緒に土器の観察をし  
ています。



土器の拓本をとりました。



発掘体験を終え、修了書の授与で  
す。「今日1日頑張りましたね」。

## 第6回古代体験まつり

10月2日(土)・3日(日)、第6回「古代体験まつり」が行われました。2日間とも小雨のふる天候でしたが、約1000人の方に来ていただきました。今年度は学習講座で制作した縄文土器の展示も行い、より県民と一体化した「古代体験まつり」となりました。その様子を見てみましょう。



お姉ちゃんのクルミの割り方見ててね。



学習講座参加者の作品です。



鏡パズルおもしろいね。



ガラス玉づくりは集中力が大切です。



私たち古代人に変身しました。



まが玉づくりの途中だけど、ピース。



昔の稲刈りって大変ね。



金沢辰巳丘高校管弦楽部のコンサートも行われました。



私、赤米のおかわり欲しいな。



草木染めに挑戦。きれいな色に染まっていますね。



縄文ポシェットづくり難しいね。

## 環日本海交流史研究集会



参加者は会場に集合



討論・パネラーのみなさん



資料見学会

平成16年10月29日に平成16年度の環日本海交流史研究集会を開催しました。今回のテーマは「古代日本海域の港と交流」です。

奈良・平安時代には港の存在がすでに古文献などで知られており、近年の発掘調査でも港やその関係資料が発見されています。石川県内でも、日本海に近い金沢市の畝田・寺中遺跡から「津」「津司」の墨書土器が出土し、港が存在することが明らかになっています。そうした調査・研究の成果を検討し、当時の港を拠点とした日本海域の交流を明らかにする目的で、このテーマが決定しました。また、今年の「まいぶん考古学講座」は県内の海や港の遺跡を取りあげた連続講座とし、9月25日～10月24日にホール展示「みなとの遺跡」を行いました。

研究集会はまず、日本海に面する各地域別の報告を行いました。地域別報告は九州から北海道までの各地域で、9名の方々に熱弁をふるっていただきました。九州の鴻臚館ほか、山陰、北陸各地、東北、北海道の調査・研究の状況などが次々と明らかになっていきました。全体としては、古代日本海域の港は日本国内だけでなく、外国使節を受け入れていたところが多く、各地域で中心的な交流の場となっていたことがうかがえたのではないかと思います。最後の全員討論では、古代の港には海岸部の港と、河川や潟湖の港が存在することが確認されました。そして、船着場状の遺構や、港に伴う宗教施設が存在するかどうか問題にされました。どちらも発見例は少ないのですが、これから古代の港を調査し研究していくうえで重要なキーワードになりそうです。

翌10月30日は、資料見学会を行いました。金沢市畝田・寺中遺跡、畝田ナベタ遺跡、戸水C遺跡、金石本町遺跡、藤江B遺跡、七尾市小島西遺跡など、港と関係しそうな海岸部の遺跡から選り出された出土品は、木簡や墨書土器に書かれた文字、人形や銅鏡など祭祀具、中国産の青磁や帯金具など、一般の村では出土しないものばかりで、港の存在を肌で感じることができました。

## 訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

### 国指定史跡 こくぶんじ 能登国分寺跡 つけたりたてものぐん 附 建物群跡

能登国分寺跡は七尾市国分町こくぶんと古府町ふるこにまたがり、水田地帯の一角に位置しています。能登国分寺はこの地方を支配した能登臣のとののみの一族が白鳳時代末はくほうに建てた大興寺だいこうじを、承和10年（843年）に昇格して国分寺としました。大興寺の時代を含め、能登の仏教の場として約400年間栄えました。

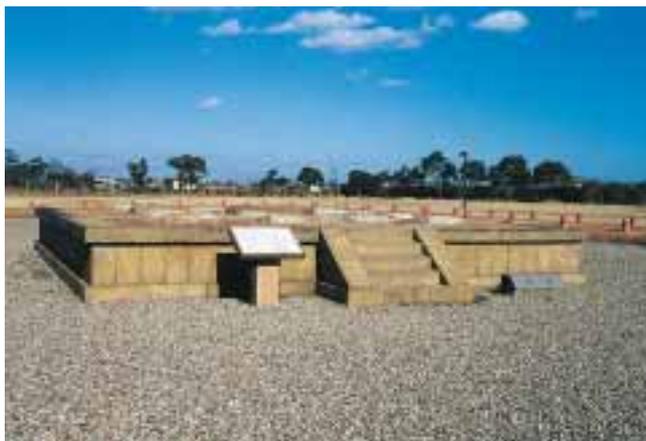
能登国分寺跡は江戸時代からその所在が知られており、考古学的な調査は大正時代に開始されました。本格的な調査は昭和45年から始まり、9次にわたる発掘調査等で金堂・塔・講堂・南門・塀・建物群が発見され、瓦がとう、土塔どとう、木簡もっかん、和同開珎等わどうかいちんが出土しました。

昭和49年「能登国分寺跡附建物群跡」の名称で国史跡に指定されました。平成元年に整備事業に着手し、南門と塀の実物大の復元、塔・金堂、講堂の跡等の遺構の復元、能登国分寺展示館の建設等が行われ、平成4年10月「能登国分寺公園」としてオープンしました。展示館では能登国分寺跡から出土した遺物や写真等を展示し、6つのブロックに分けて史跡公園全体のガイダンスを行えるようにしており、映像機器の放映によってガイダンスを充実させています。

史跡を見学するだけでなく、公園内の広い芝生の上で横たわったり、走り回ったりすることもできます。また100台以上の駐車スペースも確保されています。一度訪ねてみてはいかがでしょうか。



南門と塀



塔跡



能登国分寺展示館

#### 能登国分寺跡

交通 JR七尾駅より市内循環バス「まりん号」(東回り)で8分(能登国分寺公園下車)。JR七尾駅より車で7分

所在地 七尾市国分町・古府町地内

お問い合わせ 七尾市教育委員会文化課  
電話0767 - 53 - 8437

#### 能登国分寺展示館

開館 午前9時～午後5時(毎週月曜日、祝日の翌日、12月28日～1月4日は休館)

入館料 個人200円(高校生以上)団体160円(高校生以上、20名以上)

住所 七尾市国分町リ部9番地

お問い合わせ 電話0767 - 52 - 9850